

愛しき殺人鬼

クラウン

愛しき殺人鬼

これは禁断の恋。

こんなに深く他人を想ったことはない。この感情は恋に似ている。女同士なんて関係ない。相手のことを想うと心臓を掴まれたように胸が苦しい。できるならすぐにでも会いたいと、もどかしく思い悩む。

こんな期待をしてしまうのは、彼女が一度だけ私の名前を呼んだから。たったそれだけのことで、彼女から離れられなくなった。

私は彼女の秘密を知っている。

殺人鬼だ。

既に両手では数え切れないだけの殺人を犯している。

二十二歳。彼はいない。少し痩せぎすで小柄だ。人懐こい笑顔は年齢より幼く見える。

昼間は平凡なOL、夜には百八十度違う人格になる。

彼女は、自身が信じる正義に悖る行為を行う者に対して、命を断つという形で制裁を加える。

いつだって獲物は面白いほど簡単に引っかかる。彼女の容姿に騙されてしまうのだ。歳若い女も、いくつもの肩書きを持つ男も、彼女の容姿と巧みな話術に引き込まれてしまう。

今日は四十絡みの男。友人を騙して多大な借金を負わせ、死に至らしめた張本人。のうのうと遊び歩き、自慢げに武勇伝を吹聴していた。

洒落たバーで意味ありげに目配せをした彼女に声を掛けたのは男の方だった。

「良い場所を知ってるの」

男はゴクリと喉を鳴らした。

小糠雨の降る中、人通りの少ない路地裏に入っただけで目撃者なんていない。奥へ行ったら断末魔の声だって届かない。

華奢で自分よりずっと非力に見える彼女が殺人鬼だとは思ってもいない男は、いっそ清々しいほど上機嫌で乗り気だ。勿論、彼女の意図とは違う方向に。

彼女は足を止めて彼を見上げ、艶やかな笑みでこう言う。

「天国に逝かせてあげる」

気持ちだけは、一瞬にして天国に行けたことだろう。

心臓をナイフで一突き。呆然とした表情でよろめいた身体に、大きく刃を振り下ろす。男は声もなく倒れた。

これで狩りは終わり。

浴びた血飛沫が強くなった雨が流す。恍惚とも凄絶とも取れる笑みを浮かべる彼女は、確かに異常な殺人鬼だ。法的に犯罪者でしかない。

私に彼女を止めることはできない。無力さにどれだけ歯噛みしたことか。

悔しさと哀切の混じった温かい涙が頬を伝う。

恐ろしいことに、私の中にはこうして堕ちて行く彼女を見守りたいという気持ちもある。

彼女は平穏だった私の心を激しく揺さぶる存在。

愛しき殺人鬼——。

「おい、カズミ」

「なに？」

「お前、また同じ本読んで泣いてんのかよ」